

「勝ち負けより」友情と微笑みとフェアプレー」その中から最後までベストを尽くすことの大切さを、チームみんなの力できめたゴールの喜びを知ってほしい。さあ、一年間のがんばりを大きく咲かせましょう。

これは、1994年3月末に行われた『第25回全国ミニバスケットボール大会（東邦生命カップ）』の協賛企業である東邦生命の広告内のコピーである。（朝日3月28日）主催団体の一つに朝日新聞社があったからであろうが、その日の朝刊では一面を使ってこの全国ミニバスケットボール大会を扱い、その反面近くが、先のコピーが載った東邦生命の広告であった。このことは、小学生対象のスポーツでさえそのニュース性を認め、企業イメージづくりのための商品的価値を認めたという事であろう。

では、そのニュース性や商品的価値を認める小学生スポーツの全国大会が、先のコピーのように、「勝ち負けより」友情と微笑みとフェアプレー」・・・」と言った中身に相応しい子どもたちのスポーツ活動に支えられたものなどであろうか。

このミニバスケットボールの全国大会には、約7000チームの予選を勝ち抜いてきたわずか48チームで競われるものである。と言うことは、この大会に出場すること自体が、「勝ち負けより・・・」なんて言われてられるような練習によって達成されるものでないことは誰の目にも明らかである。7000チームの中には「勝ち負けこそが・・・」とスパルタ的な練習をくり返しているという所もあるだろう。そうした中でスポーツ障害に悩まされる者、練習についていけず挫折感を味わったり、スポーツ嫌いになっていく者もいるだろう。逆に少しうまいからといって、特別扱いを受けたり、過大な期待を受けることによって、幼くして歪んだスポーツ観を抱く者もいるかも知れない。

「うちのクラブでは全国大会に出られるなんて思っていない。ただ一つの励みとして予選に出場させているだけだ。」—実際にはこうしたクラブが多数だと思われる。しかし、励みとするとすることは勝利を追求することであり、それが全国大会となると、目標が遠いだけに、より専門的に、しかもプレイ場面だけの専門家を目指すことになっていくのではないだろうか。果たしてその事が小学生のスポーツ活動に必要なのだろうか。勉強日本一を決めるのには抵抗を示すのに、どうしてスポーツでは全国大会がここまで認められるようになってきたのか、改めて考える時期に来ているのではないだろうか。。